

フランシス・バーニー試論

—『エヴェリーナ』から『さすらう女』へ—

鈴木 万里

1. 序

フランシス・バーニーの小説は、18世紀末から19世紀初めにかけて高い評価を受け、ジェイン・オースティンにも大きな影響を与えるほど盛んに愛読されたにもかかわらず、その後長い間ほとんど顧みられることがなかった。わずかに代表作『エヴェリーナ』が時折言及される程度で、最初の重要な職業的女性作家としての位置づけが一般的であった。しかし、1970年代に始まったフェミニズム批評が成熟するに伴って、既存の作品の読み直しが行われ、バーニーの小説にも新たな解釈の可能性が示されるようになった。特に1990年前後から相次いで研究書が出され¹⁾、それまで古い時代の残滓として否定的にとらえられてきた滑稽な人物像や猥雑な場面、封建的秩序への郷愁、女主人公の優柔不断さなどが、隠された怒りや苛立ちの表現として見なされるようになった。すなわち、社会の大きな変革期に女性が置かれていた困難な状況を、作者はひとりの女性が体験したとおりにグロテスクな現実を描いているというのである。そして、「保守的」で「教訓的」な作家という偽装のもとに、急速に変貌しつつあった社会の諸相を、女性の視点から鋭敏な感覚で描いていると積極的に考えられるようになりつつある。

バーニーは『エヴェリーナ』(1778)、『セシリア』(1782)、『カミラ』(1796)、『さすらう女』(1814)と長編小説を4作残しているが、いずれも「ロマンス」の形式をとっている。「ロマンス」は古代ギリシアに起源をもち、高貴な両親に捨てられ親切な羊飼いに拾われて育てられた主人公が様々な試練の後、身元と相続権が取り戻され幸福な結婚で完結する、という定型をとる。すなわち、ロマンスとは自分が何者なのかというアイデンティティ探求の物語である。バーニーの執筆時期は、ヨーロッパの歴史が大変動を経験した時代と重なる。英国では18世紀後半から産業革命が始まり、封建社会が資本主義社会へと急速に変貌しつつあった。また、1789年にはフラン

ス革命が起こり、王制を廃して近代市民社会が成立した。それまでの秩序、制度、価値観、思想はもはや有効性を失い、それに代わる新たなシステムが模索されつつある時代であった。人々は従来とは異なった生き方を余儀なくされる。このような状況で提示された女性の自己探求の物語は、単なる娯楽作品に留まらず、当時の人々に人生モデルを提供したはずである。バーニーの小説は、近代社会への変化が女性の生き方にどのように影響したかを余す所なく伝えてくれる。『セシリア』では恋愛結婚およびロマンティック・ラブが女性の立場をいかに不安定にするか、『カミラ』では教育や家族が女性に課す制約がどれほど非人間的になりうるか、そして『さすらう女』では経済的自立の困難さがいかに女性の尊厳を傷つけるかを描いている。いずれも現代にまでつながるような女性をめぐる根源的テーマであり、しかも、当時まともに主張すれば逸脱した女性として社会的制裁を受ける危険な話題でもあった。したがってバーニーは、伝統的なロマンス形式をとり、模範的な女主人公を設定し、体制順応型の外観を守りながら、様々な工夫を凝らして、新しい時代に潜む問題点を巧みに浮かび上がらせている。

本稿では第1作『エヴェリーナ』と第4作『さすらう女』を取り上げて論じる。この2作は、貴族の父に認知されない孤児である女主人公が、様々な試練の後、本来の身元と財産を取り戻し、貴族(またはそれに準じる)の男性と幸福な結婚をするという、典型的なロマンスである。しかし、共通の筋立てにもかかわらず、描かれる世界や問題意識がまったく異なっているのは注目に値する。バーニーは20代に執筆した作品を、自らの経験に照らして36年後に書き換えたと言えるかもしれない。小説としての完成度から見ると『エヴェリーナ』の評価が高く、『さすらう女』は冗長でまとまりに欠けると批判されてきたが、逆に言えば、あえて作品の完成度を犠牲にしてでも表現したい内容が、作者にはあったと考えられる。そこで、この2作を比較しながら、近代社会への変化が女性の生き方にどのように影響したかを探り、最終的にバーニーが達した結論までの道筋を辿ってみることとする。

2. 『エヴェリーナ』

18世紀は前近代と近代との過渡期に当たる、振幅の大きな時代であった。身分制による階層社会が次第に崩れ、個人主義に基づく競争社会へと移行するに伴って、人間の生き方も大きく変化していく。典型的な例はダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)に見られる。余裕のある中産

階級に生まれたロビンソンは、父親の意志に逆らって家を飛び出し船乗りになるが、難破してひとり無人島に漂着する。しかし、不屈の精神と勤勉さで数多くの試練を克服し、やがて大きな財産を築いて35年後に英国に戻る。資本主義社会に最も適応した人間像を描いたと言われる小説であるが、この物語に女性の姿がないことは象徴的である²⁾。自らの能力を生かして社会的成功をめざすことができたのは、男性だけであった。女性たちは結婚市場における競争に参入し、生活を保障してくれる夫に依存する以外に、生活手段をもたなかったのである。

そして、18世紀には結婚形態もまた大きく変化する。それまでは家同士の釣合いや利害を考慮して、親や親族が取り決めた結婚が主流であったが、次第に本人たちの自由意志による恋愛結婚が望ましいと考えられるようになる。これは、個人の意志を尊重する点では民主的と言えるが、実は重大な落とし穴が潜んでいる。生活力の乏しい女性は、経済力のある男性との結婚、いわゆる上昇婚を望むが、経済格差のある結びつきは女性の立場を著しく弱める結果となる。結婚が両方の家によって保証されていた時代とは異なり、結婚が個人の選択に基づく関係となると、女性は実家という有力な後ろ盾を失うことになったため、夫の考え次第で待遇が決まるという不安定な状況に身を置かざるをえない。つまり、夫が一方的に結婚生活をうち切った時に、法的能力をもたない妻はなすすべがないことを意味する。恋愛結婚は、女性を上位の社会階層に引き上げることを可能にしたが、他方で、身の破滅をもたらす危険性も限りなく大きくなった。リチャードソンの『パミラ』(1740)と『クラリッサ』(1748)は、その両極端の例を描いている。結婚は女性にとって、それまで以上に人生を左右する一大事となったのである。

『エヴェリーナ』の女主人公が生まれるまでの経緯は、まさに恋愛結婚の危険性を体現しているかのようである。彼女の祖父イヴリン氏は周囲の反対を押し切って居酒屋の美しい女給と軽はずみな結婚をし、フランスに逃れて2年後に娘キャロラインを残して失意のうちに亡くなる。キャロラインはかつてイヴリン氏の家庭教師を務めたヴィラーズ師のもとで18才まで育てられるが、再婚してデュヴァル夫人となった母親に呼び戻されパリに向かう。ところが、デュヴァル氏の甥との不本意な結婚を迫られ、追いつめられた果てに、彼女は放蕩者のサー・ジョン・ベルモントと秘密に結婚してしまう。しかも、期待したほどの財産が手に入らなかった失望と、デュヴァル夫妻の再三の嫌がらせに閉口したサー・ジョンは、結婚証明書を破棄して、結婚し

たことさえ否定するという暴挙に出たのである。やむなくヴィラーズ師のもとに身を隠したキャロラインは、娘エヴェリーナを出産して、不名誉を回復する手だてもなく絶望のうちに亡くなったという。2世代にわたる不幸な恋愛結婚の末、ヴィラーズ師に育てられたエヴェリーナは父親の姓を名乗ることもできず、身元が曖昧な状態にある。当時の女性は独立した人格とは認められておらず、父または夫の保護下にあるべき存在と見なされていた。このような堅固な家父長制の社会構造にもかかわらず、家父長＝父親がまったく機能していない環境で、エヴェリーナは生きていかざるをえない。彼女の周囲ではすべての父親が無力または無責任である。祖父は娘をわずか千ポンドの遺産のみで元家庭教師に託して亡くなるし、父は娘を認知しようとなしない。エヴェリーナを大切に育てた父親代わりのヴィラーズ師もまた、「いずれは真価を認めてくれる夫に託して、彼女の腕の中で安らかな死を迎えたい」³⁾と楽観的な見通しを語るが、私生児の境遇でふさわしい結婚相手が見つかる可能性は極めて低いことくらい、当時の常識であったはず。しかも、彼はエヴェリーナを正当な嫡子および相続人としてサー・ジョンに認知させるための手だてを何ら講じようとはしない。やむを得ず、17才の彼女はいわば孤立無援の状態、ヴィラーズ師の知人レイディ・ハワードに連れられて社交の場すなわち社会に出ていくことになる。

『エヴェリーナ』の世界では、女性は父親という縦軸と夫という横軸が交わる地点で社会的位置が定まり、それに従って待遇が決まる、相対的な存在であることが歴然としている。すなわち、エヴェリーナのようにいずれの座標軸も持たない若い娘は、あらゆる機会に居場所がないことを痛感させられる。本人のみならず、周囲の人々もまた位置を測りかねて戸惑い、便宜的に彼女がその時に一緒にいあわせる集団の社会階層に準じるものと見なす。したがって、貴族と同席している時には極めて丁重に扱われ、低い階層の親類と行動を共にしている時には無礼な扱いに耐えねばならない。さらに、父や兄という保護者を持たない女性は、上流階級の男性による容赦のない性的攻撃にさらされることが明らかになる。「敬意を込めて礼儀正しく接してもらうためには、家柄と財産が必要」⁴⁾であることを思い知らされる。そのような試練を経て、エヴェリーナは次第に社交の規範を学びながら、上流社会にふさわしい振舞い方を身につけていく。ここで強力な武器になるのが、美貌とともにすぐれた感性(sensibility)や美德(virtue)である。18世紀には sensibility が重視され、「洗練された情緒を感じ取ることができる能力、ものごとを見分ける繊細な感受性、苦悩に鋭敏に共感でき、文学や芸術に感動で

きる敏感さ」⁵⁾という特殊な意味を持っていた。エヴェリーナは強い感情に襲われると、赤面したり、倒れたり、失神したりするが、このような鋭敏な身体性は、純粋な精神や美德の記号として見なされる。また、ぞんざいな扱いを受けたり、性的嫌がらせに脅かされたり、親類の卑俗な態度を目にしたりと、彼女が当惑や混乱を示す場面が極めて多い(*distressed, embarrassed, confused, bewildered, perplexed, mortified, distracted, provoked, terrified, shocked*と数多くの形容詞が頻繁に使用されている)が、これも繊細な感受性の証であり、また、適切な保護者をもたない女性がどれほど苦況に陥ることが多いかを物語っている。そして適切なマナーを備えているかどうか、信頼に値する人間であるか否かの基準になる。ここでのマナーとは単なる社交儀礼に留まらず、個人の感性やモラルを示す尺度と解釈できる。

エヴェリーナは初めての舞踏会で、声をかければ女性がたやすく意のままになると考えて自由に物色する男性たちの姿に憤り、ダンスを申し込まれても決して応じまいと決意する反骨精神を備えていた⁶⁾。にもかかわらず、男性優先の上流階級そのものに批判の目を向けることはない。また、非道にも母を捨てて死に至らせ、自分を拒絶した(これは誤解であったことが後に判明するが)父に対する恨みや非難を口にすることも一切しない。あくまで上流社会は羨望の対象であり、『エヴェリーナ』は特権的世界へのイニシエーションの物語として展開する。反対に、母方の祖母デュヴァル夫人やその甥一族といった商人職人階級の卑俗さ、厚かましさ、身勝手さはエヴェリーナにとって耐え難いものと映る。彼らと行動を共にせざるを得ない時、いたたまれない思いに苛まれ、同年代の又従姉妹たちとも少しも馴染めない。このようなエヴェリーナを「スノッブ」⁷⁾と呼ぶことは容易である。しかし一方で、父の姓を名乗れないというハンディキャップを負いながらも、上流社会の作法を習得し、手段を選ばない放蕩貴族の度重なる攻撃をかわして(母の陥った失敗を繰り返すことなく)、最終的には、人格、家柄ともにすぐれた理想的な貴族オーヴィル卿に求婚されるに至る、賢明さとしたたかさを兼ね備えている。また、貧困の末ピストル自殺しかけた隣人を必死で助ける⁸⁾という大胆な行動力も示し、単なる軽薄な上流気取りとは一線を画している。一方で、格下の女性を性的対象物としか見なさない準男爵サー・クレメント、マートン卿、下院議員ロウヴェル、また、悪意に満ちた悪戯を繰り返すマーヴァン大佐など、弱者を保護すべき立場を忘れて狼藉の限りをつくす上流男性たちの愚行や、なすすべもなく耐える女性たちの姿に、伝統的階級社会の秩序が急速に崩壊しつつある様を見て取ることができよう。ノブレス・オブ

リージュを實踐し、良識を備え、尊敬に値する唯一の貴族オーヴィル卿は、封建社会の最後の輝きと言えるかもしれない。

『エヴェリーナ』は男性優位の社会でありながら、男性たちは実質的に保護者として機能していない(オーヴィル卿を除いて)。善良な育ての親ヴィラーズ師でさえも、エヴェリーナの身元を回復するための努力を初めから放棄しているように見える。他方、彼女の実父サー・ジョン・ベルモントに直接交渉し、父娘の対面を実現させ、事態を一挙に解決に導くのは、すぐれた知性と行動力を備えたセルウィン夫人である。夫人はバーニーの小説に必ず登場する、「女らしさ」の規範から逸脱することを恐れずに自分の意見を主張する、個性的な女性像である。彼女は、「女性には美と善良さ以外に何も見るべきものがない」⁹⁾と女性蔑視を平然と口にする傲慢な男性たちに正面から反論し、痛烈な皮肉を浴びせることも厭わない。しかし、賢明で頼りになる同性の味方に対するエヴェリーナの反応は、極めてアンビヴァレントである。その主張の正当性には内心共感するものの、あえて社交の場で男性と議論する大胆さは、エヴェリーナの「良識的な」マナー感覚には耐え難いものと感じられ、いたたまれない思いがする。この優等生ぶりが彼女の限界とも言えるであろうが、年若く財産も家柄もない女性が上流社会で生き抜いていくためには、このような妥協もやむを得ぬ選択であったに違いない。いずれにせよ、異性からの性的好奇心にさらされ、同性との完全な信頼関係も築けずに、肩身の狭い思いをしながら自分の居場所を捜すエヴェリーナの姿には、一見近代社会が解放したかのように見えながらも、実は自立的に生きる手段を与えずに放り出した弱者の、苦難に満ちた歴史が刻まれていると言えるであろう。

3. 『さすらう女』

バーニーは20代で執筆し出世作となった『エヴェリーナ』と同様、身寄りのない孤児を女主人公とした設定で、60代に再び、男性優位の社会で保護者のない女性の苦境を、さらに深刻に描き出した。もはや牧歌的な雰囲気も、オーヴィル卿のような理想的な貴族も存在せず、フランス革命を経てヨーロッパが大混乱に陥っていた時代を彷彿とさせる、振幅の激しい物語となっている。小説の半分近くまで女主人公のファースト・ネームから境遇まで一切明らかにされないままで進行し、複雑な事情が終わり近くによく判明するなど、破格の構成をもち、作品としてのまとまりは欠いているにもか

かわらず、作者の主張には注目すべき変化が見られる。ここでは、『エヴェリーナ』との相違点を中心にして『さすらう女』を分析し、バーニーが至った結論とは何であったのかを考察してみたい。

『エヴェリーナ』は、田舎で育った少女が、上流社会にふさわしい女性となることをめざして、社交のルールを学び、適切な振る舞いを身につけ、自分を磨いていくという、典型的なビルドゥングス・ロマン(成長小説)である。しかし、『さすらう女』は、女主人公が自力で生活することを余儀なくされ、追いつめられて次第に社会の下層に降りていく、正反対の方向性を示している。ここでは、「中流階級の女性(実は貴族の娘)が自活の道を探る」という、当時のタブーにあえて挑んでいる点が注目される。

この作品は、フランス革命後の恐怖政治の頃、英国人を乗せた船が密かにドーバーに向けて出航しようとする時に、みすぼらしい色黒の女性が乗せて欲しいと助けを求める場面で始まる。仮にエリスと呼ばれるようになったものの、名前も事情も一切明かそうとしない無一文の女性は、周囲の好奇心と反感をかき立てる。やがて変装のために塗っていた色も落ち、美貌のみならず、最新のダンス、ハープ演奏、文学の素養など、すぐれた知性や教養を兼ね備えていることがわかるが、依然として身元もわからず、謎めいた行動が多い。エリスは生活費を得るため、住込み家庭教師になろうとするが、偶然ハープの個人教授を始める。しかし、上流社会の人々はレッスン料をまともに払おうとせず、楽器代や家賃などで借金を抱える結果となり、自活の道は閉ざされる。次に、針仕事で生計を立てることを試みるが、彼女が寝る間を惜しんで励んでも、いかに労多くして益の少ない仕事であるかを痛感させられる。身勝手な上流の人々からは代金をなかなか支払ってもらえず、仕入れのために借金せざるをえない。やがて裁縫店で働くことになるが、速い仕事と洗練されたセンスゆえにお針子仲間からねたまれ、また、労働に対する正当な報酬とは言え、賃金を受け取ることに抵抗感もあり、惨めな気持ちに苛まれる。しかも、仕事が一段落すると、いきなり解雇され、住みかまでも失ってしまう。思いあまって、かつては辞退した仕事である、気難しい婦人の住込み付添婦を引き受けることにするが、雇い主のあまりの傲慢さ、横暴さ、そして屈辱的な扱いに閉口して辞職する。やがて親切な友人の援助を資本にして、幼なじみの親友とともにロンドンで小さな裁縫洋品店を始めるが、ふたりとも上流の出身で商売の基本を知らないために、店の修繕や税金など思わぬ出費がかさんで、破産の危機に陥る。しかし、その後、自分に賞金がかかけられ、フランスから追手が迫っていることに気づいたため、ひとり

放浪の旅に出る。農家や密猟者の家などを転々とし、森をさまよい、家のない女性がどれほど無防備で、容赦のない攻撃にさらされるかを実感する。このように、エリス(本名ジュリエット)は、次第に社会の下層にまで分け入り、家と保護者をもたない女性にとって、安全な居場所がどこにもないことを思い知らされる。彼女の苦難にみちた日常生活が延々と詳しく述べられるために、定型のハッピー・エンディングがひどく唐突に感じられるほどである。

ジュリエットの体験を通して、女性の自活を困難にしている要因が次第に明らかにされる。まず、女性の能力や趣味は家庭の中で家族の生活を豊かにするために発揮されるべきもので、その才能を公の場で披露したり、ましてや仕事にして報酬を得るべきではないという、社会通念が広く浸透していることである。ジュリエットは、自らの教養を役立たせようとすれば二重の屈辱を味わうことになる女性の不自由な身の上を、次のように嘆いている。

How few,...how circumscribed, are the attainments of women! and how much fewer and more circumscribed still, are those which may, in their consequences, be useful as well as ornamental, to the higher, or educated class! those through which, in the reverses of fortune, a FEMALE may reap benefit without abasement! those which, while preserving her from pecuniary distress, will not aggravate the hardships or sorrows of her changed condition, either by immediate humiliation, or by what, eventually, her connexions may consider as disgrace! ¹⁰⁾

しかし、コンサートの舞台に立つという計画が持ち込まれた時、ジュリエット自身も強い懸念を示すことからわかるように、その社会通念に完全に支配されている。最後に彼女と結婚することになるアルバート・ハーリー氏は、「礼儀作法」'propriety'¹¹⁾を強調し、趣味をプライベートな領域に留めておかなければ、いずれ身内に巡り会えた時にその体面を傷つけ、迷惑をかけることになるかと繰り返し忠告する。女性は資産のある男性の一種のステータス・シンボルであったため、高い教養や才芸を備えていることは賞賛の対象となったが、それを収入と結びつけることは、父親や夫の不名誉とされたのである。そして、女性は家族のために奉仕することを生き甲斐とすべきで、自分の才能を伸ばして社会から認められたいなどと考えるはずがないという「女らしさのイデオロギー」も、19世紀には定着しつつあった。中流以上の女性が自分で生計を立てなければならないという状況は、保護すべき男性の

怠慢もしくは、男性の保護を拒絶する女性の傲慢を意味し、本来あってはならない異常な事態とされたのである。

また、女性蔑視が、農民、労働者階級にも広く浸透している実態が指摘される。農夫が農作業に携わらない女たちを価値のない劣った存在として見ており、その息子たちも母親や姉妹を見下して威張り散らしている様子¹²⁾を、放浪中のジュリエットは目にしている。そして、女性の苦難の主な原因は、役立つ生活手段をもたないこと¹³⁾だと実感する。社会全体に偏在する女性蔑視が、生活力の欠如に根ざしているとすれば、女性の自活を不適切としている社会通念そのものが、女性の価値を落としかけている元凶であるはずという告発が極めて間接的になされている。

さらに、『エヴェリーナ』では身を守る有効な手段となった、美德や感性が、『さすらう女』では、役立たないばかりか、かえってジュリエット自身を追いつめる結果となる。適切なマナーを備えているかどうか、人格を見極める尺度となった前者とは対照的に、上流社会にふさわしいマナーゆえに、ジュリエットは、ハープ教授のレッスン料も請求できず、洋裁店で働いても賃金を受け取ることに罪悪感を覚える。屈辱的な扱いを受けて住込み付添婦の給料も辞退して出て行こうとする。最も現金を必要とする境遇でありながら、美德ゆえに受け取ることを潔しとしないのである。その結果、心ならずも借金がかさみ、一層身動きがとれなくなっていくという悪循環を繰り返す。その上、恩人の司教の命と引替えに結婚を強制されたフランス人の夫に見つかり、持参金目当てに無理やり連れ去られようとする危機的な瞬間にも、決して助けを求めることはない。妻は全面的に夫に従属すべきものであり、逆らうことは許されないのである。マナー・コードは身を守るどころか、自らを縛る鎖と化していることが明らかである。

さらに、同じ階層に属する年長の女性たちから共感や協力を得られないことが、ジュリエットをより深刻な苦境に立たせている。エヴェリーナを攻撃したのは、身元の曖昧な娘に遠慮は不要と考えた上流の男性たちであったのに対し、ジュリエットに屈辱を与えるのは、3人のフェアリーズ(復讐の女神)に例えられる¹⁴⁾ハウエル夫人、アイアトン夫人、メイプル夫人という年輩の女性である。彼女たちは、上流社会の秩序ひいては自らの特権的立場を守るために、名も家ももたぬ若い女性を容赦なく貶める。ジュリエットの高い知性や教養を見れば、同等以上の階層に属することが推察できそうなものであるが、家柄と財産しか人物保証をもたない人々は、それをもたぬ者を排斥することで、自らの威厳を取り繕おうとする。女性を家庭に囲い込むこと

でコントロールする社会にとって、「さまよう女」は危険分子と見なされる。作者はこの作品で、女性に対する、男性優位の社会における男性からの攻撃のみならず、そのようなシステムを内在化させた女性たちによる抑圧に主眼を移しているように思われる。女性たちの意識の改革こそが事態を打開する糸口になることが、示唆されている点は注目すべきであろう。

一方、逆境のジュリエットを物質的にも精神的にも支えてくれるのは、主に、エリナー、レイディ・オーロラ、レイディ・バーバラという若い世代の女性たちである。いずれも、恵まれた立場にありながら、母を亡くして、伯母や伯父の厳しい管理下に置かれている。そして、サー・ジャスパー、ジャイルズ・アーブという、変わり者だが裕福な独身の老人たちもまた、必要な援助を惜しまない。さらに、商人テッドマン氏、農夫の妻マージェリなど、階層が異なっても力になってくれる人々が登場することも特徴的である。エヴェリーナは、下の階層に属する親戚たちに対して常に違和感を抱いており、頼りになるのは、セルウィン夫人、ハワード夫人、オーヴィル卿など、上流社会の年長者であった。対照的に『さすらう女』では、程度の差はあれ、社会の中で周縁化された人々が共感を示し、積極的に関わってくれる。他人の痛みを理解できる者同士の協力体制こそが、将来に希望をつなぐ唯一の道であると、作者は伝えているようである。最後に、ジュリエットの強制された結婚が無効となり、初めから変わらぬ愛情を示していたハーリー氏と結婚すると、苦難の時期にジュリエットを支えてくれたすべての人々が交際範囲に迎えられる。無慈悲なハウエル夫人ら3人の追放は、既成の階級構造もしくは社交規範に対する決別を意味するものと考えられる。

『エヴェリーナ』同様に、『さすらう女』でも父親は無力もしくは無責任である。ジュリエットの父、グランヴィル卿は若い頃、美しいが財産のない女性ジュリエット・パウエルと密かに結婚したが、彼女は出産後ほどなく亡くなり、娘は母方の祖母に育てられる。頑固な父親メルバリー伯爵に呼び戻され、最初の結婚をうち明けらぬままに、名門で財産家の女性と再婚することになったグランヴィル卿は、娘ジュリエットの後見を親友であるフランス人司教に託し、最初の結婚証明書および遺言補足書を作成して、今後生まれるであろう娘たちと同額の財産を、自分の死後分与するように取り決めた。祖母の死後、司教の勧めでジュリエットを英国に呼び寄せ、公表する計画が進んでいる最中に、グランヴィル卿は落馬がもとで亡くなってしまふ。また、父親代理の司教も、フランス革命に伴う混乱がもとで城とともに重要書類を焼失してしまふ。そして、ジュリエットは司教を処刑から救うために、

脅迫に屈して財産目当ての男との結婚に同意し、それ以後、苦難の逃避行が始まる。女性の自活を認めない社会でありながら、保護者たるべき実の父も代理の父親も、心ならずもジュリエットが必要とする庇護を与えることができず、彼女は独力で生きる手段を講じなければならない。伝統的な家父長社会が、すでに機能していないにもかかわらず、それに代わる方策が何もないことが、『エヴェリーナ』以上に強調されている。

作者は、女性の自活という当時のタブーを扱うにあたって、読者の反感や批判を招かぬように、細心の注意を払っている。古典的なロマンス形式をとり、模範的な女主人公を設定することで、失われた秩序と権威が回復される物語を再現して見せる。一方で、慎み深いジュリエットとは対照的な脇役を登場させて、革新的な発言をさせる。このような個性的な脇役の配置は過去の3作にも見られ、いわばバーニーの常套手段であるが、『さすらう女』のエリナーは、これまでのセルウィン夫人、オノリア・ペンバートン、アールベリー夫人よりもはるかに過激で、女性の抑圧や男女の不平等について、大胆な考えを表明することを少しもためらわない。エリナーは転地のために滞在したフランスで自由思想の洗礼を受け、因習に縛られた従来の生き方を刷新しようと決意する。女性の権利とは、人間の平等という本質に基づいたものであり¹⁵⁾、自分は古い常識には囚われないと宣言する。彼女は女性が長い間不当に扱われ、言動を制限されてきたことに対して激しく反発する。

Why, for so many centuries, has man, alone, been supposed to possess, not only force and power for action and defence, but even all the rights of taste; all the fine sensibilities which impel our happiest sympathies, in the choice of our life's partners? Why, not alone, is woman to be excluded from the exertions of courage, the field of glory, the immortal death of honour;—not alone to be denied deliberating upon the safety of the state of which she is a member, and the utility of the laws by which she must be governed: —must even her heart be circumscribed by boundaries as narrow as her sphere of action in life? Must she be taught to subdue all its native emotions? To hide them as sin, and to deny them as shame? ¹⁶⁾

「なぜ女性があらゆる社会活動領域から排除され、行動のみならず自らの感情すらも押し殺さなければならないのか？」これは、エヴェリーナもジュリエットも内心感じていながら、決して口にすることがなかった問いかけであった。バーニーは最後の作品でようやく、副題とした「女性の苦難」の核心に触れるに至ったようである。さらに、エリナーは自分の芸術的才能を活

用すべきとエリスを鼓舞し、女性を家庭に閉じ込めておきたい男性の機嫌を損ねることを恐れて、恵まれた資質を世に披露することをためらっていると非難する¹⁷⁾。そして、男性支配の社会構造を痛烈に批判する。

By the oppressions of their own statutes and institutions, they render us insignificant; and then speak of us as if we were so born! But what have we tried, in which we have been foiled? . . . Woman is left out in the scales of human merit, only because they dare not weigh her!¹⁸⁾

「男性は女性を抑圧して、とるに足らない存在にしておきながら、まるで女性が生まれつき劣っているかのように言う」という指摘や、「男性が女性の価値を認めようとしないから、女性は人間としての長所から疎外されている」という分析は、ジュリエットが達した結論にきわめて近い。にもかかわらず、彼女はエリナーに決して共感を示さない。

エリナーの人物造形には作者のアンビヴァレントな態度が投影されている。社会の不公平や女性の苦難の本質をとらえる高い知性を持ちながら、一方で片思いの男性への愛情を公言し、受け入れられないと知るや激情に溺れて自殺未遂を繰り返すという、典型的な「女性の弱さ、脆さ」を示す。行動があまりに常軌を逸しているために、その意見もまた荒唐無稽な印象を与えてしまう。エリナーの描写は、フェミニスト的発想や生き方は自己破壊につながるという作者の強い危惧を示していると考えられる。これは、自由と平等を求めて戦ったフランス革命が、結果的に恐怖政治を生んだ経緯が背景にあるに違いない。また、「女性の権利」を主張して自律的に生きたフェミニスト、メアリ・ウルストンクラフトが非難を浴びて、社会的に抹殺された事情も深く影響しているであろう。エリナーがウルストンクラフトをモデルにしているという指摘は以前からなされている¹⁹⁾。さらに、人権宣言(男権宣言とも読める)に倣って「女権宣言」を執筆して処刑された、マリー・オランプ・ド・グージュもその思想を実践につなげることができなかった。急激な社会の変化や発想の転換は、破壊的な結果をもたらし、事態は一層悪化するという懸念を、フランス人亡命貴族と結婚し、英仏両国の実状をつぶさに観察した作者は、強く抱いていたことが確実である。とは言え、無節操にも革命思想に染まった愚かな女性としてエリナーが描かれているとは考えにくい。なぜなら、これまで『セシリア』や『カミラ』でも、女主人公が心神喪失の状態ですべて本音を口にするという場面があり、「狂気」という偽装のもとに、普段では決して表現することを許されない内容を明らかにするとい

う手法を、バーニーはたびたび使用しているからである。とすれば、エリナーはジュリエットの分身とも考えられる。いずれも、正反対の生き方、考え方を示しながら、どちらも自虐的、自己破壊的である点で共通である。女性が自律的に生きることが必要な状況でありながら、そのような生き方が破滅的にならざるを得ないという、作者の内心の矛盾葛藤を、対照的なふたりの登場人物が体現していると言えるであろう。

4. 結び

『エヴェリーナ』と『さすらう女』を比較すると、孤児が幸福な結婚に至るという同様の筋立てをもちながら、36年間のうちに、社会情勢も作者の意識も大きく変化したことが明らかである。第1に、社会構造が変質しつつあることが挙げられる。エヴェリーナは父娘の和解を果たすが、ジュリエットの父はすでに死亡しており、法的な手続きによって血統が保証されるものの、再会は不可能である。これは、封建的家父長制の衰退を象徴するものであろう。あるいは、人間同士の繋がりよりも、法律によって秩序が維持される近代社会への移行を表しているとも考えられる。

第2に、エヴェリーナにとって身を守る砦となったマナーが、ジュリエットには行動の自由を奪う牢獄となっている。ナンシー・アームストロングによれば、18世紀初頭に女性にとって何が最も大切かという基準が変化したという²⁰⁾。従来のように、生まれや身分でなく、適切な振舞い方を身につけているかどうか(すなわちマナー)が重要視されるようになり、中産階級の女性を積極的に評価する傾向が生まれたのである。しかし、ジュリエットの生きた19世紀初頭には、そのマナー規範がかえって女性を束縛する足かせと化していることが明らかである。社会の急速な変化が、適切な保護者をもたない女性を大勢生み出しているにもかかわらず、彼女たちが生きる手だてを講じることは礼儀作法(propriety)に著しく反する行為として、厳しい社会的制裁を受けた。また、女性たち自身もそのような行動規範を内面化し、身動きがとれなくなっていた。それに対して、作者は有効な解決策を探しあぐねている。エリナーのように社会通念と正面から対決する姿勢は、不毛であるばかりか自虐的になるとして、否定的である。とは言え、ジュリエットが礼儀作法を重視するアルバート・ハーリーと結婚する結末は、決して「完全な幸福」を意味するものではない。なぜなら、女性をめぐる状況は、何ひとつ改善されていないからである。マーガレット・ドゥーディはバーニーの主

人公の名前に注目している²¹⁾。エヴェリーナはあらゆる女性の先祖とされる‘Eve’を連想させ、エリスは‘Elle’(フランス語の She)を含むとすれば、このふたりの苦難の体験は、すべての女性に共通の運命を示唆していると解釈できる。「女性版ロビンソン・クルーソー」²²⁾という言及で締めくくるジュリエットの遍歴は、皮肉にも、望む物をすべて手に入れて人生に満足する人物像とは、好対照をなしている。ジュリエットは本来もっていたはずで、一時的に失っていたもの(名前と相続権)を回復しただけである。冒険心に駆り立てられて広い海に乗り出し、巨万の富を築いて故郷に凱旋するロビンソンとは、境遇がまったく異なっている。クリスティーナ・ストロブの、「男性には成功や達成があるが、女性には喪失しかない」²³⁾という指摘がまさに当てはまる。唯一、作者が『さすらう女』で新たな可能性を示したと考えられるのは、階級を超えた人々との共感や協力であろう。『セシリア』にも、実現しなかったものの、女性たちの共同生活という構想が見られた。バーニーは、混乱する時代の中で女性が尊厳と品位を失わずに生きる手だてを見出せないながらも、他人の痛みを理解することのできる人間同士の繋がり、わずかに将来の希望を託していたに違いない。

注

- 1) Kristina Straub, *Divided Fictions: Fanny Burney and Feminine Strategy* (Univ. of Kentucky P., 1987), Judy Simons, *Fanny Burney* (Barnes, 1987), Margaret Anne Doody, *Frances Burney: The Life in the Works* (Rutgers Univ. P., 1988), Julia Epstein, *The Iron Pen: Frances Burney and the Politics of Women's Writing* (Univ. of Wisconsin P., 1989), Katherine M. Rogers, *Frances Burney: The World of 'Female Difficulties'* (Harvester Wheatsheaf, 1990), Barbara Zonitch, *Familiar Violence: Gender and Social Upheaval in the Novels of Frances Burney* (Univ. of Delaware P., 1997).
- 2) 冒頭にロビンソンの母親、最後に船長の未亡人と、帰国後結婚した妻についての言及があるが、いずれもごく簡単に触れられるだけである。
- 3) Fanny Burney, *Evelina or the History of a Young Lady's Entrance into the World* (Oxford World's Classics), p.15.
- 4) *Ibid.*, p.294.
- 5) *Oxford English Dictionary*, 'sensibility' 6 および, G. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain* (Univ. of Chicago P., 1992) 参照。

- 6) Fanny Burney, *op.cit.*, pp.28-9.
- 7) 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生』ミネルヴァ書房(1995) p.211.
- 8) Fanny Burney, *op.cit.*, p.182.
- 9) *Ibid.*, p.361.
- 10) Fanny Burney, *The Wanderer, or Female Difficulties* (Oxford World's Classics) p.289.
- 11) *Ibid.*, p.338, p.343.
- 12) *Ibid.*, pp.696-7.
- 13) *Ibid.*, p.693.
- 14) *Ibid.*, p.872.
- 15) *Ibid.*, p.175.
- 16) *Ibid.*, p.177.
- 17) 18) *Ibid.*, p.399.
- 19) cf. Judy Simons, *Fanny Burney*, p.108, Barbara Zonitch, *Familiar Violence*, p.129.
- 20) Nancy Armstrong, *Desire and Domestic Fiction: A Political History of the Novel* (Oxford Univ. P., 1987) p.3.
- 21) Margaret Anne Doody, *Frances Burney*, pp.40-1.
- 22) Fanny Burney, *op.cit.*, p.893.
- 23) Kristina Straub, *Divided Fictions*, p.9.